

ジャワ島中部地震への緊急支援（実施報告と御礼）

5月27日(土)、インドネシアジャワ島中部の古都ジョクジャカルタ近郊において直下型大地震があり、日本の阪神淡路大震災にも匹敵する死傷者を出しました。

死者5,782名、負傷者36,226人、避難民343,352人(6月5日現在)と発表されています(写真1)。

私共PHJはインドネシア事務所(ジャカルタ)の伊藤所長が被災中心地バントゥル郡立病院院長からの要請のもとにレントゲンフィルム、現像液を携行して直ちに被災地に入り、PHJとしてできる支援について調査しました(写真2)。

バントゥル郡では医療施設の多くが被災していましたが、その中で被災を免れたバントゥル郡立病院では、骨折患者用の診断・治療機材が足りず、緊急補給の強い要求がありました(写真3)。

この現地調査・面談をもとに、PHJとして募金活動を開始することとし、同時に複雑骨折治療機材(ボルト、固定用補助プレート、同チューブ、各サイズ合計400セット分)及びリハビリ用具(松葉杖各サイズ合計100組)をジャカルタで緊急調達し寄贈させて頂く事にしました。

機材はチャータートラック便により6月5日には同病

院に搬入され、素早い動きに感謝の声があがっています。今回の緊急支援総額は約150万円です(写真4)。

今後については、現地状況と募金状況を勘案しながら進める事とし、最終報告はHP或いは次号ニュース等により行ないます。

ここに私共の取り組みをご一報し、募金はじめご支援いただきました皆様にあつく御礼申し上げます。



写真1:被災直後の映像
提供:防災システム研究所・山村武彦氏



写真3:バントゥル郡立病院訪問(左から2人目、PHJ伊藤所長)



写真2:レントゲンフィルムおよび現像液



写真4:骨折治療機材の病院搬入

巻頭言

ピープルズ・ホープ・ジャパンの活動に期待



ピープルズ・ホープ・ジャパン理事
前田 一雄

鳥取大学名誉教授

ピープルズ・ホープ・ジャパンの始動を心からお祝いする。この名称は今後の活躍を強く示唆していて、諸外国の方々への支援も含まれることは、これまでのプロジェクトHOPEジャパンや筆者の超音波診断装置寄贈と医療支援にも明らかで、途上国支援はさらに強力に推進されるであろう。

わが国でもかつては妊産婦死亡率、周産期死亡率が高かったが、妊産婦死亡率は1900年(明治33年)に比べて現在は1/72という著明な改善をみた。周産期死亡率は、胎児死亡と生後1週間以内の新生児死亡の合計死亡率であり、1950年(昭和25年)に最初に発表されたが、以後急激に低下して現在は初期の1/13で世界最低になった。それには医学の進歩と産科小児科医療関係者の努力が根底にあるのは明らかで、従って医療援助は途上国の母子支援に効果的であるが、日本では社会構造の変化も大きく貢献しており、

1970年代の産業発展期には都市分娩と医療施設分娩が急増すると共に周産期死亡率は急減して、進歩した医療を有効に利用できる社会体制の整備が人々の幸福を推進することは明らかであり、途上国支援に際しても考慮したい。

一方、UNICEF発表の世界各国の周産期統計をみると、母体死亡率では低死亡率の国が少し増加したが、死亡率の高い国々の分布には殆ど変化がなく、その中で最も頻繁に見られる死亡率は現在でも日本の50倍で、最高母体死亡率は日本の328倍である。途上国では周産期死亡率の発表はまれで、やむをえず母体死亡率から推定しているが、推定周産期死亡率が高い群での最頻値は少し低下したが日本の31倍であって、母体死亡率と推定周産期死亡率共に1925年の日本にほぼ等しく、改善の進行が非常に遅い。子供が死亡すると新たな家族の出生が望まれるが、分娩が多くなるとリスクが高まって母体死亡が増加する。実際、母体死亡率は合計特殊出生率に比例している。そのため、最近では分娩間隔を最低3年に延長することが提唱されているが、一方、HIVの蔓延や母子感染は大問題であり、また医療と共に住居・道路・衛生・分娩介助・慣習・識字率など基本的状況にも改善すべき目標は甚だ多いので、今後のピープルズ・ホープ・ジャパンの強力な活動が期待される。

タイ活動報告

●小児先天性心臓病手術支援



PHJは1998年からこの手術支援事業を始め、今まで200人を超える子どもの命を救うことが出来ました。この手術の成功は医師の技量のみならず、子どもの患者さんの術前・術後をケアする専門

看護師の技量が左右します。PHJはチェンマイ地区だけでなくタイ国内の専門看護師育成にも力を入れています。今年1月から3月、36人の看護師を選抜して手術後のケア技術研修を実施し、タイ心臓協会の認定看護師を育成しました。

研修中、生後8ヶ月と28日のバリボンチャン(写真)は心臓手術後に血圧の急上昇という危険な状態になりましたが、研修に参加した看護師と医師の献身的で適切な処置によって、危機を乗り越え順調に回復し、無

事退院しました。彼らはバリボンちゃんのほか31人の子どもの看護を通して貴重な経験を積み、自信を得ることが出来ました。



バリボンちゃんをケアする看護師

カンボジア活動報告

●将来の家族のため、自分のコミュニティのため、これからの国のため

コンポントム州の教育局のリクエストを受け、PHJは全体のコーディネイト役で学校保健教育(ピア教育*)を一つの高校でトライアルとして行っています。内容は、自分のコミュニティで起こっている保健問題(妊娠時のトラブル、家族計画、子供の下痢など)を取り上げ、学校の先生や診療所のスタッフなどへのインタビューを通して問題の要因を探り、予防のための保健知識を自分たちの村で共有します。

これから家族を作ってゆく思春期の学生に母子保健を中心とした保健教育を行うことはとても重要です。しかしながら、カンボジアの学校では定期的な保健教

育のクラスがありません。また、保健教育活動を通して母子保健の知識を得るだけでなく、社会の一員として、自分のコミュニティのために何かを行うことを体験してもらいたいとも思っています。長い内戦によって、同じ村の住民同士が信頼することが出来なくなった経緯を持つカンボジアでは、ピア教育は特に特別の意味を持ちます。ピア教育を通じて、自分のコミュニティのために保健知識を共有することの大切さ、他人を思いやることのすばらしさを実感してもらえたらと思います。

※ピア教育:自分の得た知識を家族や友達に伝達する方法



保健教育についてのオリエンテーション



ピア教育発表前

インドネシア活動報告

●オモチャをたくさんありがとう

ホームページやホームページで教育玩具のご寄付をお願いしましたところ、予想を上回るダンボール箱18個分も頂きました。インドネシアで実施している母子健康プログラムやカンボジアで活用します。

ホームページNo.35号ではインドネシア・セラン郡チャレナン自治区テラス村で、小学校を間借りしているタマンポシアンドウでの活用状況をご報告しましたが、今年4月には立派なタマンポシアンドウ第1号



フラボヤン保育所(タマンポシアンドウ)

が完成し、頂いたオモチャを寄贈しました。40人の5歳未満児が楽しく学び・遊んでいます。

私たちはこのタマンポシアンドウでの総合保健活動



完成を祝う幼児

モデルを成功させて、第2・第3のタマンポシアンドウ展開につなげたいと考えていますが、現在の実施規模には十分な数の玩具となりましたので、ご寄付受付はしばらくお休みさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

イラク支援に向けて

イラクの現状は、フセイン圧政から戦争に至る間に、罪のない国民、特に子供たちが苦しんでいることに心を痛めている人が多いと思います。しかしイラクの治安が十分でなく日本人が入国できない現在、PHJ単独のイラク支援は不可能でありました。

こういう中でProject HOPEのバスラ小児病院計画が明らかになりました。その内容は小児治療と同時にイラク全国の小児医療スタッフに対する研修を行い、イラクの医療レベルを改善・向上させるもので、イラク保健省の強いニーズによるものです。1998年にPHJも協

力してオープンした「上海小児医療センター」の成功がモデルになっています。

この計画に関してPHJへ協力依頼がありました。Project HOPEとの連携でイラクへの医療支援が可能になるならば一つのチャンスととらえ、人道支援の見地からFeasibility Studyを続けてきました。「子供の健康に手を差し伸べる人道支援」はPHJミッションに合致するからです。

一年余の調査の結果、「バスラ小児病院に、内視鏡と顕微鏡を寄付し、同時に専門スタッフの教育を行い、医療分野においてイラク復興のための人道支援」を計画中です。事業予算は約6000万円です。この資金は主に外務省補助金を予定しておりますが、理事会承認を得ましたので補助金申請の準備中です。審査結果は秋以降と思いますが、決まりましたら支援計画全容をお知らせします。

5才未満児死亡率(人/1000人)

イラク	125	タイ	26
カンボジア	140	日本	4
インドネシア	41	UNICEF 世界子供白書 2005	



建設中のバスラ小児病院(2006年4月)

バスラ小児病院・完成予想図



会員のひろば



「援助を受けた人間として」 三村 博さん(個人会員)

僕がホープの会員になったのは、
今から4年前だった。

僕は精神障害者で病名は総合失調症。当時障害者年金を貰っており、働かないで、楽しんでお金を手にして少し余裕が出来、困っている人に少しでも役に立てたらと思うようになりホープの会員になった。

僕は18歳で病気になったのだが、その後何年もたつてようやく病院に通うようになった。そして先生に働くようにと言われて働いた時期もあった。辛い思いをしながら遮二無二働いた。その後年金を貰うようになり仕事をしなくなった。自由気ままな生活を送った。そして先生に薬は指示通り飲みなさいと言われて。僕は薬はずっと飲んできたが服薬時間は守らなかった。やがて薬をきちんと飲むようになり病気は安定した。そして先生は僕に毎日1時間歩きなさいと言った。もう歩き始めて3年以上になる。サボる事もあったが率にすると8割以上のペースで歩いている。やがて病気は良くなり年金は貰え無くなった。困っている人を助けると言っても、何から何まで全て良くするというところまではできないと思う。

それに援助する側も資金的に困難な面もあると思う。自分は援助がなくなった訳だがこれ以上どう病気を良くしていったらいいかというのはレベルの高い問題であり全然わからない。ただ今思うことは、自分はこれまで先生の言うことをふらりふらりではあるが実行してきてどこか先生を信頼していたのであろうということである。

又先生が僕を支えてくれたのだということである。病人とお医者さんとの間で一番大切なのは信頼関係と思う。僕は先生の言う通りしてきて良かったと今つくづく思う。病状は昔に比べて非常に楽になったからである。そんな信頼関係がホープの皆さんの活動で少しでも広がっていきければいいなと思っている。

そして僕自身が今以上に先生を信頼できるようになればよと思う。それは年金という援助を受けてゆっくりした生活を送るようになったから感じたことでもあるのだろう。僕は現在は仕事には就いていないが薬を指示通り飲む、毎日一時間歩くということは続けている。

(ホープ注)

三村さんは会費のほかに毎月500円の寄付を続けてくださっています。病気のことは存じませんでしたが、一同心から感謝し、ご快癒をお祈りします。

お蔭様で10年「感謝の集い」へのお誘い

皆さまの暖かいご支援のお陰で、ピープルズ・ホープ・ジャパンが今年10周年を迎えることになりました。そこで10周年を記念して「感謝の集い」を開催し、

現地スタッフからの報告や国別ブースを設けて現地紹介を行いたいと思います。(別紙、案内をお送りします。)

日時：**8月24日(木) 17時00分～19時30分**
場所：如水会館(東西線竹橋駅) Tel: 03(3261)1101

●●● 応援メッセージの募集 ●●●

このたび「10周年記念誌」の発行を計画しています。その中に、皆様から応援メッセージをいただき掲載したいと思いますので、ご協力ください。

(お願い) メッセージは**70字以内**としてください。

【例】アジアのお子さんに本当に少額ですが寄付できる喜びをありがとう。
今後も仕事をがんばり継続して応援します。(武蔵野市 佐藤孝子様)

締切り：**7月14日** (氏名・住所を連絡ください。匿名希望も可能です)
送付先：**ピープルズ・ホープ** 行き (FAX 0422-52-7035)
FAX 0422-52-7035 E-mail: info@ph-japan.org
武蔵野市中町 2-9-32 (〒180-8750)